

---

# 神様の落とし物

二神 切火

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

神様の落とし物

### 【NNコード】

N6243W

### 【作者名】

二神 切火

### 【あらすじ】

人には七つの罪があるという。

『傲慢』『嫉妬』『憤怒』『怠惰』『強欲』『暴食』『色欲』

その罪をつかれども七体の神と、その神を束ねる天の神。

いづれかの神を召喚し、使役する一族。天神家。その一族の二つの分家、

神を身の『外』に宿す、外神家。

神を身の『内』に宿す、内神家。

それらを絡めて弄ぶ謎の組織。

すべてが交差するとき、人と神は再び繋がりあう。

## プロローグ（前書き）

『ままに書いてみました。』

『気に入つもらえたなら幸いです』

## プロローグ

【神様】 つていると思つ?

俺は、そう聞かれたら確實にこう答えていた。

「いるかもしないし、いないかもしない」

だが、今はちがう。同じ質問をされたら今の俺は迷わずに、固定的な肯定の意をしめすだろう。

…例えば、だ。まあ、別に例えじゃないが、例えとしよう。

ある日突然、女の子が現れ、そいつが超が付くほどわがままで、自分が落とした宝物を探せと命令してきて…

そしてそいつは【神様】で…

そんな例え話が例えじゃない話に変わったら?

…泣けてくるだろ?

これはそつ、そういう物語。

後に歴史に大きく刻まれる『七つの災厄』の一つの『田の『災厄』

の  
物語

。

## 第一厄　その出来ごがまわじへ災厄ですか（前書き）

すいません。もともとの第一厄、投稿済みだったんですが、何かの手違いで削除してしまったみたいです。

慌てて書き直したので文脈におかしなところがあつたら教えてください。

## 第一厄　その出来事がまさしく災厄です！

ドカッ……！

勢によくベッドから落ちた。

おかげでいつもより痛烈な朝だ。

いつもは落ちないはずのベッドから落ちた理由は知っている。

「……おい。起きる。姫歌

ひめか

俺のベッドで寝ている妹の姫歌をたたき起こす。

おせりくはまた、夜中にトイレへ行った後、寝ぼけて俺の部屋に来たんだろうが… そのたびに俺は「いつに跳られてベッドから落ちていい。

一体これで何度もだ？

「うう……ん、ふあ……」

俺の怒声に気づいて目を覚ましたであろう妹と寝返り様に目があつた。全く…いい年してなんて様だ。Yシャツ一枚で寝てるとは…。

いくじり春になつて、少しほとぎすがくくなつたからつて、風邪を引きこくといとう時期ではないんだぞ。

「おはよっ…お兄ちゃん」

「とつと起きて自分の部屋へ行け」

「そ・の・ま・え・に・… んつ！」

そつ音につつ、田をつむり顎を突き出しながら、何かを求めている。

『何か』は言つまでもないが… 正直言つてうぞー。

そう思つた俺は手刀で姫歌の頭を割る。

ズガツ！！

鈍いような、それでいてインパクトが決まったような音が鳴り響く。

「ふえ～ん… 痛いよ～」

「兄妹でそれは出来ないって何度も言わせんだ！」

「兄妹つて言つても血繋がつてないもん！歳も一緒だし！誕生日だつて…」

そう、この妹、もとい義妹はちょっとした訳で家族になつた幼なじみだ。

だが、こいつは昔から容姿があまり変わらない。

顔立ちはまあ、正直言つてかわいい。青くストレートな長い髪に青白く輝く瞳が姫歌の最大の特徴だ。だが、体があまりにも華奢過ぎる。それに顔がかわいいっていつても体がそれに追いついてない分、口っこ子に見えてしようがない。

何年もこんな感じなんだから妹としてしか認識出来ない。

「…それについては親父達と決着がついたろ？海外に転勤した途端、その話題はやめてくれ」

「うう…。だつて~」

「だつて~、じゃない」

ズビシッ！！

再び手刀。

今度のは明らかにインパクトだ。

…結構、軽くやつたつもりだったんだが…「ド」「ピン感覚で…

これはマズイ…よな…

「うう…」

そう呻いた妹の瞳は潤んでいる。少量だがその涙が頬を伝っているのがわかる。

「…悪い。やり過ぎた」

いやまた。やり過ぎた所の話ではない。妹もとい義妹だからといつ

て女の子を泣かせてしまった。男として最低だ。

「あーひー。泣かしちやつたよひね～椎名君」

刹那、唐突にかけられる声。ふと部屋の扉の前田をやるとそこには姫歌の双子の姉であり、俺の姉でもある美歌がたつていた。

「ちょっと話、聞かせてもらひえるかしら～？」

「…はー」

そう答えるしかない。このねえさん…言動は穏やかだが、顔が笑つてない。

…そりやそりや。自分の妹を泣かされたら怒らない姉はいないだろうな。

てこりか朝っぱらからめんどくさい事に巻き込まれてないか…俺…。

\* = 2 (前書き)

第一厄： 第一話つて事です。なのに厄除けとか2とかつけてすいません。

さて、俺は現在、ねえさんからお叱りを受けているわけだが、全く。妹が妹なら姉も姉か…。

この人も好きだねえ~、ゾシヤツ。

なんだ? そんな恰好だと寝やすいのか? かさばるだろー…逆に…

「ちよっと……聞いてるの? 椎名君!」

「逆に寝にくいくわ!」

「……」

「…えつー…?」

無言にならぬえさんと呆気にとられる俺。そんな気まずい空気が流れれる。

…が、一人のウザつたらしこ女の前ではそんな空気はこれまで流れなくないらしく。

「まあまあ、お姉ちゃん元気も。そつカリカリしなこでよ

そう、姫歌にとつてそんな空氣は無意味だ。しかしここつ…やつ  
は『お兄ちゃん』とか言つてたくせに今度は普通に『椎名』ときた  
もんだ。

「でも、でもね！？姫歌ちゃん…」

「はいはい、私はもう大丈夫だから。そもそも嘘泣きだし」

「「…えつ？」」

ハモる俺とねえさん。たつた一文字でも『ハモる』つて領域に入れ  
ていいのかは謎だが、見事なまでに『ハモった』。

「だつて、あんな弱めの『ヒビン』感覚の手刀じゃ赤ちゃんだつて  
泣かないよ～、たぶん」

なるほど。あれで嘘泣きとは芸達者だ。芸能事務所の人があいつら思  
わずスカウトするだろ？なんせ長年の付き合いの俺もそうだが実  
姉まで惑わせたんだからな。

だがそれでも『思わず』だ。歳相応に体が追いついていたら『思  
わず』は『迷わず』に変わつていただろ？スカウトが來てもせい  
ぜい子役だ。

パンツ…！

そんな事を考えていたらねえさんがいきなり両手を勢いよく合わせ  
て軽快な音を鳴らした。

「…なら、手打ちにしましょう。」めんなさい、椎名君」

ねえさんりい。元凶たる根源が発覚したらすべてを帳消しにしてくれる。

『底無しの抱擁』とはよく言われたものだ。

てこいつか、なんでこの人、謝つてんだ?

事の『根源』は確かに姫歌かも知れないが、『元凶』は俺だろ。『何謝つてんだよ、ねえさん。謝るのはむしろ俺の方だつて』  
『…じゃあ、わざきも言つたように何かで手打ちにしましょつ。…  
そうね~…今日の食事は椎名君だつたわよね?…だったら朝食は私が  
作るわ。あくまで朝食は、だけどね』

なるほど。それは確かに助かる。しかし、それではねえさんだけが損をして俺だけが得をした感じだ。

「なら俺は何をしようか…」

そう相手に聞こえなこいつにしづぶやいて、何かいい案を考えようとした。

…のだが、ビツヤリ聞こえたらしこ。

「じゃあ椎名君は私を『ねえさん』じゃなくて『美歌』って読んでもらえるかしら?…父さん達もしばりくは海外だし…ね?昔みたいに

今だけは『幼なじみ』に戻りたい

幼なじみ、か…。そうだな。少なくとも『そい』で踏み止まるべきなんだ。もつ『あの頃』みたいには……。

「いかねえよなー！…いいぜー美歌…」って事で朝メシようしくな

そつ今までの空氣をぶち壊す勢いで叫ぶよつこねえさん 美歌の言葉に肯定の意を示す。

「…うん」

そう呟いて微笑む。たぶん俺が何を考えていたのか美歌もわかつてゐるんだろう。もつ『あの頃』には戻れない。この道を選んだのは俺達一人の合意の上だと。

「じゃあ、私も椎名つて呼ぼ」

それまで全く存在を忘れていた姫歌が口を開いた。

「いや、お前既に呼び捨ててたから…」

「ありや～せだつけ～」

「ふふ…。それじゃあ私は朝食の支度をしましょつか

そつ言つてイスから腰を持ち上げた。

だが俺はその行為を留める。

「ちょっと待ちなよ、美歌さん」

「誰が美歌さんですか」

「いやスマン。いきなりねえさんから美歌に替えるのは正直違和感がある。さつきは勢いに任せて美歌つて読んだが、ありやたまたまだ。なんせそう呼ぶのは2年ぶりなんだ。善処してくれ」

「わかったわ。でも今日中には直してね」

「つむ。それで呼び止めたのはだな……姫歌にも関係があるんだが」

「何?」

「何かしら?」

一人がそれぞの形で疑問符を浮かべる。

「ああ……。さつきから気になつてたんだが、

「ひー」は幼なじみとして言わせてもらおう

「うん」

「どうぞ」

二人が頷く。

そんな二人に俺は言つてやる。

「この時期にYシャツで寝るのは良くないって」

場は沈黙。

あれ、俺、何かおかしいこと言つたか？

力チャヤ… 力チャヤ…

箸とお茶碗がぶつかる音だけが鳴り響く。

美歌が作った朝食を3人で囲み、会話もなく、箸を口へと運び続ける。

普段ならテレビの一コースをつけて

「へえ～。なるほど、最近の流行りは〇〇か～

とか

「世間じや何かと物騒ね～」

などの当たり障りのない会話が繰り広げられているのだが、

そこはほら、さつき俺がYシャツの事を口走ったから?「こんな空気が流れているらしい。」

いや、俺は正論を述べたつもりだったんだが…

「そういえば、今日から学園か。早く支度しないとヤバくね?」

どうにか沈黙を破ろうとさうぼやいてみる。そのセリフのなかには少なくとも『何この空氣!…さすがと学校行きたいぜ』という気持

ちが含まれている。

だが、それはかなくも虚しい願いは頑として叶う様子はない。なぜなら…

「何言つてゐる。今日は10時登校よ？」

だそうだ。

「え？ なんで10時？」

「もう…昨日の夜も言つたじゃん…！ 今日は…」

どうやら今日は在校生の始業式が終わつたらそのまま入学式に入るらしい。入学式は13時から。俺達、新3年生は始業式終了後、学園内に装飾の飾り付けという作業があるとのこと。なんともまあ、雑用な使用だ。それでも俺達（3年）はまだマシな方だと見える。2年なんて、3年と同じ作業に加えて、校内清掃、新入生誘導、新入生歓迎の劇の運営などがあるらしい。まあ他にも色々あるらしいがハツキリ言つて知りたくもない。ていうか…

「最後のはいらなくない？」

「そんなこと私に言わないでよ。これも『新入生は何かと緊張してから劇でちょっとでも…』っていう生徒会のはからいなんだから」

そう言つ姫歌はどうか不機嫌そうだ。そりや当然といえば当然といえる。風紀委員の姫歌にとって新年度初日にそんな祭まがいなものを作られては迷惑以外の何物ではない。

「でも大丈夫じゃない? だつてあくまで初日よ?」

今までしゃべらずに朝食を食べていた美歌が口を開いた。どうやら完食したようで一人、お茶を啜っていた。

「でも毎年一人はいるのよね~。狂気的な問題を起こす人。姫歌ちゃんもたいへんよね」

「いや~、もしそうなつても大丈夫。椎名達に助けてもらひから。ね?」

そう言いつつ、何か期待の眼差しでこっちを見てくる。だが俺はそんな期待に答えることは出来ない。

「すまないな。今日は『叢集』をかけていい。俺はともかく『俺達』では助けられないぞ」

「ええ? でも何かあつたらみんな察して駆け付けるんじゃないの?」

「ああ。いつもならそうだが、みんな『出張中』だ。今、学園にいるのは俺と結城くらいだ。せめて残つてるのが結城じゃなくてミーナならたとえ『出張中』でも『叢集』出来たんだが…」

「ふーん…。意外と役にたたないんだね。結城君も」

姫歌よ…。それを本人の前で言つんじゃないぞ。あいつはあれで結構デリケートなんだ。

「大丈夫よ。そんな事が起こつたら私たちのどこから何人か派遣するから。これぐらいで二調律<sup>チヨーニング・トライアングル</sup>は乱れないわよ」

… 美歌の『三つ田』調律とは学園内に置ける三つの勢力を表している。

一つ目は姫歌が委員長を務める風紀委員。活動内容の基本は一般的な学校とさして変わらない。風紀を乱す者への制裁。といえば聞こえは言いがその実質は『制裁に手段を選ばない』といふところにある。暴力、拷問といった、まあ人間性を疑う行動を行っていた。だが、姫歌が委員長となつたと同時にそのルールを少しだけ改変した。いや、『少しだけしか』改変できなかつた。

そして、その『少しだけ』で姫歌が創つたのが美歌が委員長を務める懲罰委員会。これが二つ目だ。しかし『懲罰』とは名ばかりでそれは風紀委員の活動内容を崩すためのものだ。

学園内において『底無しの抱擁』と言われることからその優しさの度合いがわかる美歌が懲罰委員に移籍したのならどう転んでも『懲罰』に悪いイメージは浮かばなかつた。

つまり『暴力』は風紀委員が、『拷問』は懲罰委員が引き継ぐ事によつて不正者を取り締まるルールを柔らかくしたのだ。

加えてこの二つの委員会…

役割が異質過ぎるため、『三つ田』の存在をひた隠しにしている。だがそれでいいと俺は思つ。なぜなら『異質』といつ点においては三つ田の方が明らかに、いやさらに入れを上回るくらい異質だからだ。

ひた隠しに、といつよつはむしろ隠れみのとして風紀委員と懲罰委員を立たせているところの風にも捉えられなくもない。

：いちいち、曖昧な発言を繰り返しているのは、それが俺の客観的私感だからだ。

つまりは三つ目、『諜報委員会』は一般生徒に認知されていない。いや、『認知』はそれでいるが『正確な活動倫理』が知れ渡っていない。俗に言われる社会の表裏で表すなら諜報委員会は明らかに裏だ。だが、設立構造がかなり複雑なため、表としての顔も持っている。それが『派遣委員会』だ。

ところよりも『派遣』しつつ、『諜報』するという方が正しいのかもな。

：一般生徒に「便利屋」やら「雑務屋」とかと呼ばれているのは別として。

「準備出来たか？」

「ええ、大丈夫よ」

「姫歌は？」

「姫歌ならもうすぐ来るんじゃないでしょうか？…ほら」

「『めん。遅くなっちゃって』

「いや、いいさ。 それじゃ行きますか」

玄関には俺と美歌。そして今しがた2階から降りてきた姫歌がいる。さつきまで髪を下ろして見分けがつかなかつた一人だが（俺には見分けがつかないわけがないが、端からみたら、という話だ。無論、姫歌と美歌ではスタイルがちがいすぎているから一人をよく知る奴がみたら一瞬で誰が誰だかわかるだろう）、姫歌はツインテールに、美歌はポニーテールにしている。こうしてみれば、一人とも違つた雰囲気がでていて、健全な男子なら見とれている事だろう。

玄関のドアに鍵を掛け、学園に向かつて足を踏み出した。時間にして8時30分。10時に登校という前付けを明らかに無視していた。学園までは30分ほど歩けば容易にたどり着く。だからこの時間に家をでるのは少し早いと思つ。

しかしそうした理由は美歌が朝食を食べ終わった後に口走った言葉が原因だった。

「さて、そろそろ準備しなきゃ」

「あれ? もういくのか?」

「いぐら向でも早くない? 今日懲罰委員つてなにがあった?」

お互いの思う所を姫歌と共に問いかける。そして美歌はうしろめいたような表情で、

「ええ…。昨年度にやり残した書類の整理をしなきゃならないの」

「うつ…」

それを聞いた瞬間、俺たち一人の声はどもつた。

「風紀と諜報はそれもう昨年度の分は片付けたんでしょうけど、懲罰はそもそもいかなくて…」

なにせ人手が…と続けた美歌だがそんな事はどうでもいい。そしてそれはきっと姫歌も同じのはずだ。

「姫歌…」

「え…？ あ、はい？」

「…仕事、終わってるか？」

そして静かにあはは、と笑って首を横に振った。

「よし、学校へ行こ。」

とまあ、こんな感じで今にいたるわけだが、正直、こんな状態じゃ『三調律』なんて成り立たねえな。うん、不思議とそれだけは言える気がする。何故なら美歌は「人手が…」とぼやいていたが、俺が所属している諜報委員会に比べればマシだと言える。

現在、諜報に残された人数は俺と結城の二人。あの4人は面の顔『派遣委員』として『出張』状態だ。

「それにしても、ここまでくると一番大変なのは諜報だよね。何てつたつて人手が…。まあ、頑張りなよ」

「…他人事。こいつはもう少し気の利いた事言えないのか？」

「まあ、手があいたらあたし達も手伝いに来るから。ね？ お姉ちゃん」

「ええ、そうね」

前言撤回。やはり姫歌は愛すべき存在だ。

「…ありがとな」

「お互い大変だしね。協力していかないと。…特にこの時期は」

「…そうね。やはり今回も？」

おそれらく一人はさつき話した『狂氣的な問題を起こす人』の事を言つてゐるんだね。

「その事ならさつき結城に連絡しておいた。あいつもすでに市内のキナ臭そうな所はチェックしていたらしい。 だが、今のところは何もないようだな」

「…くえー。 隨分、下準備がいいのね、結城君は」

「けど気は抜けないよね。例年が例年だから…」

さつきまでの陽気な雰囲気は一気にシリアルスな雰囲気へと変わつていた。

しかしそれは前方からかけられた声で一気に元の雰囲気へと戻つた。

家をでて15分の地点。ちょうど学校への道のりの中間地点にあたる交差点でその声の主は待ちかまえていた。

「おはようございます。先輩方。そして何よりもお久しぶりです」

「ファイアナか…。久しぶりだな」

「おお～！ ファイーちゃん久しぶり」

そこにいたのは懲罰委員2年、ファイアナ・

K・クロステリア。アッシュブルondenの髪に翠の瞳。どこか気品を思わせる整った顔立ち。年下とは思えないほど大人びている。

「ちゃんはおやめ下さいと何度も申し上げたつもりなんですが…」

名前からわかるらしいが、本人いわく日本人とイギリス人のハーフらしい。

「可愛いからいいじゃん」

「そつは言われましても…」

「そういうや、何でファイアナは待つてたんだ？ 今日は別に待ち合わせしないだろ？」

「はい、実は私も昨年度に残した仕事の事を気にかけておりまして。それで先ほど美歌先輩に連絡したところ、今から学園に向かうとの事でしたので、失礼ながら賛同させていただきました」

「そういうこととか」

「それにしても、その話しかべたの？」

「そう問い合わせるのは美歌。確かにそれは俺も気になっていたところだ。

「はい。自分で申し上げるのは少々あつでがましいことなのですが、皆様も御存知の通り私は変わった体质の持ち主なので…」

変わった体质。 フィアナは周りの影響を極端に受ける体质らしい。言語、口調、行動、仕草、はたまた思考回路まで…。たとえそれが自分の意志に反していても、だそうだ。その影響から抜け出すのに、三ヶ月はかかるらしい。…もしくはミーナの『術』を使うか、だな…。

「なるほど。じゃあ、イギリスに戻つてたのね？」

「はい、不本意ながら春の休暇は本国の方に…。よつやく、日本語に『戻れた』のはつい昨日の事でして…」

…いつたいこいつの実家はどうなつているんだらうか？ もしやめちゃめちゃ金持ちの貴族様なのか？ それとも英国人とやらはみんなこんなお上品なお口調なのでしょうか？

「何ぶつぶつ言つてんの？」

「い、いや。何でもないさ。それよりも姫歌、全くもつて忘れていたが、早く学校行かないとヤバくないか？」

「あつ……」

そうだ。例年の事件の話や、久々にフィアナに会つた事もあって、『昨年度の仕事の残りを片づける』という目的を忘れていた。

「や、ヤバいよ、椎名！……こんな事してるとこじゃないよ」

「あ、ああ……。悪い、美歌。フィアナ。俺たち先行くわ」

そつ言つて姫歌と一緒に走り出そうとした。しかし、

「何言つてるの？　学校なりもつて鼻の先じやない」

「「……え？」」

言われてみると、直線100メートルも充たない距離に学園の門が見えた。

「……いや、この距離を後悔に歩く時間さえもつたいたいねえ！……いくぜ姫歌！……」

「アイアイサーー！」

そう言つて一人で走る。

そしてその勢いのまま、校舎敷地内へ…

『ウー！ ウツー！』

はいれなかつた。

「…あれ？」

いや、はいれてはいるが、敷地に入った瞬間、対不審者用のサイレンが鳴り出した。

いや、俺この生徒ですけど？ 不審者じゃないんですけどー…？

「…まさか椎名…。個別学生認可証、忘れたの？」

「…」

「あれ、どうしたの？ 一人共、ていうかこのサイレンの方がどうしたのー…？」

そこにはやつて来たのはまさつきの一人。

「いや、椎名が認可証、忘れたつぽくて」

「ええ！？ そつなのですか、椎名様！？」

「…」

「ど、とつあえず取りに戻つたら？ そつすればせめて10時までには戻つてこられると思うわ。このサイレンは風紀と懲罰権限で止めて置くから」

「…なんか…もう…疲れた

そりやそりです。10時まで来たのにまさか認可証を忘れるとは。我ながらバカだと思います。

「…とりあえず……認可証、取りに行くわ…」

そつうなだれつつ、身を翻して、来た道を再び歩き出す。

背後からはけたたましく鳴り響くサイレンと、弁解は任せといてねーと叫ぶ姫歌の声が聞こえていた。

個別学生認可証。全体的に白く、銀色の校彰がほられた手帳。俗に言われる学生証だ。だが、それを学生証と呼ぶ奴はこの学園にはいない。なぜなら、学生証は『学園の生徒である事を認める』ものであつて、個別学生認可証はそれ以外にも様々な役割をになつてゐるからだ。

例えば、自動販売機。ポートの部分に個別学生認可証をかざすだけでタダで飲み物が飲める。といった具合だ。

俺達が通う学園、皇学園の生徒はいづれの公共サービスは認可証を持つてゐるがぎり、『タダ』でサービスを受けられる。

医療機関の利用しかし。電車、バスの運賃しかし。飲食店も、コンビニも、何から何まで、だ。

持つてゐるだけで、すべての行動が認可されている。故に生徒は『認可証』と呼ぶ。もしくはこの手帳が一個人しか使用できないことから、『個別証』と呼ぶ奴もいる。…『何でも帳』とかいう奴もいたな。

「いや、そんな落書き帳みたいに言わなくても……」

玄関のドアの鍵をあけつつ、俺はそうぼやいた。さきの学園に入れなかつたので、認可証を取りに来たわけだ。

玄関のすぐ横にある階段を一直線に駆け登り、自分の部屋にある机の上を見渡す。そこには黒塗りの、そして金色の校彰がほられた手帳があつた。

「…黒の個別情報体か…」

ブラック・アカウント

一般生徒のソレとは違つ認可証を手にとってブレザーの内ポケットに入れた。

「さて、いきますか…」

これで学園のセキュリティはなんなく突破出来るはずだ。

「仕事の整理は…もうできないな

もう、何て言つか…。笑うしかねえ。

「はは、…はあ

そしてその後に溜息吐くしかねえ。

「…つたぐ。書類くらいい家に持つて帰らせろってんだ」

学長曰く、風紀と懲罰と諜報は機密事項を扱う委員会のため、校外での活動を禁ずるんだそつだ。ていうか…。

「学生に機密もクソもねえだろ…！いや、まあね？諜報はいろいろと秘密にすべきことあるけどさ…！派遣委員にそれはないんじやねえの？便利屋とかつて呼ばれてんだよ？」

と独りで心境をぼやいても、…こや、叫んでも何も始まらないな。

「…学園行こひつ」

玄関に鍵をかけてそう呟いた。

さつきも見た光景を再度見ながら学園へと向かう。一つ違つの道行くひと達の中に学園の制服を来た奴らがいるくらいか…。ふと、腕時計をみやると既に9時半を回っていた。…まあ、中間地

点は越えたから遅刻する心配はなれどだが、今日はどうかしら不  
幸が付き纏つてゐみたいだから、少し急ぐかな。

そつと自分に言い聞かせた、次の瞬間…。

「……！」

(ん?)

何やら怒鳴り声のような物が、聞こえた気がした。……聞こえてきた  
のは空地奥の建設途中だったデパートのほうか…。

その付近の道行く生徒を見てみると、明らかに『見て見ぬフリ』を  
決め込んでいる。

「……はあ。何でこんな朝っぱらから…。人の気持ちを考えたことあ  
んのか」

俺は静かな怒声を呴いて、声がした方へ歩きだした。そして、そこ  
を一望できる辺りまで来たところで、「やつぱりか…。はあ…」と、  
いい加減自分でも聞き飽きた溜息を吐き出した。

そこには漫画やアニメに出て来るような、『不良がカツアゲする現場』

のよつな場所だ。そして今、田たしてこるのは正ヒツレ。

「だから、持つてないって言つてゐるじゃないですかーー。」

「おーおー、嬢ちゃん。皇の制服着といて持つてないって事は無いだろー? やつさと『何でも帳』とやらを出せよーー。」

「だからもつてないんです!! 私は転入生で、その学園には今日から登校だから『何でも帳』とかわけの分からぬもの、持つてるわけないの!」

絡まれてる女生徒は、若干遠目なため（ていつか俺は田が悪い）見えずらしいが、長い黒髪をなびかせている。背は俺より少し低いくらいか…。

（大和撫子つて奴だな）

絡んでる奴はガタイがでかく金太郎辺りがいい呼び名かもしけない。

……俺としてはその後ろで控えている細身の眼鏡野郎が気になるが

…。

「やべえ…。めんどくせえ。てか、この学園、転校制度無いんだが…。それ以前に何であの女は喧嘩しねんだっ？」

「フフ。…仕方ありませんね。こうなつたら体に直接聞きましょうか？」

「おお！？ やつひやこますか？ 確かにこの上玉ならボスも喜ぶつしょーー！」

(……)

俺はそれまで考えていた思考を停止。

「アリの兄さん達。アリまでこじりたひどいっ！」

静観していた俺はそれを止め、男一人にそう言い放った。

「なんだてめえ」

それに気づいたガタイのいい男は身を翻し俺にそう言いながら睨み

つけて来る。

「彼女を引き取らせてもらう。抵抗するなら容赦はしないが？」

そう言いながら、せつき内ポケットに入れた認可証を見せつける。

「はあ！？ なにそれ？ 水戸黄門にでもなつたつもりか！？」

怒声をあげつつ、俺に近づこうとする大男。しかしそれを眼鏡野郎が軽く手で制す。

「…やめなさい。忘れたんですか？ 彼が持っているのは『黒の認可証』。事を構えるのは些か不粋というやつです」

チッと舌打ちする大男をいなしながら眼鏡野郎は俺に向き合つた。

「いやー。連れが失礼しました。それじゃあ私たちはこれで。いざれ『また』…」

一人去つていく後ろ姿を見ながら、

「いや、もう一度と会いたくねえけどー？なんだよ、またつて」

と叫ぶ俺に後ろから話かける女生徒が一人。

「あの……どうもありがとうございました」

(アレ? わつきの喧嘩じしつぶりが感じられなくなつたな)

振り返つて再度彼女を見てみると、

「うお……」

といつ言葉しか出て来ない。ヤバいが…可愛すぎる。姫歌も美歌も可愛いほうだがこの女生徒は段違いだ。今時珍しい長い黒髪に漆黒の瞳。体格は美歌と同じくらいか。

「あの! 聞いてますか?」

「え? あ、はい?」

「実は私、転校の手続きをしないといけないので、これで…! お礼は後日改めて」

「ああ、そんなのいいから。ていうかついでに転校制度は…」

そこまで言つて氣づく。瞬きをしていただけなのに、彼女はいつのまにか俺の目の前からいなくなつていた。

「は？ 消えた？ いやいや『一般生徒』にそんなこと出来るわけ…。 ま、いいか」

過ぎたことはしようがない。人生前向きに、あるがままを見て、受け止めて、理解しなきやな。

「いや、ていうか…」

ふと目に入った空き地に設置されている大きな時計の文字盤を見ると、既に10時5分前まで針が進んでいた。

「遅刻じゃん！！ …ま、いいか。人生前向きに。って出来るか！  
！ 初日から遅刻つてどんなんだよ」

それでも俺は学園に向かつて歩を進めた。

椎名が空き地に設置されている時計をみて、驚愕してからその場を立ち去ろうとする後ろ姿を建設中だったデパートの屋上から見下ろす人影がふたつ。

「…それで？ どうすんだよ」

その中の体が大きい男がそうぼやいた。

「いえいえ、どうもしませんよ。彼が黒の認可証を持つているって事は恐らく三調律に関係する人物。あんな『ただ者じやない集団』に関わるつもりなんありませんよ」

眼鏡をかけたいかにも優男というイメージだが、纏っている空気がそういうじゃないとおもわせる。どうやらこの一人は先の女生徒を脅していた不良のようだ。

「カビオマーならどうにかなつたんじゃねえか？」

「…貴方はもうちょっと敵を見定める感覚を研ぎ澄ませたらどうですか？ いくら私が『殺人術』を学んでいたとしても、恐らく今の少年には敵わないでしちゃうね」

「…そなの？」

「そうですとも。多分、赤嶺さんでもてこずるんじゃないですか？」

「…ボスも手にかかるほどなのかよ。ますます恐ろしいぜ、皇学園」「なに…。既に『布石』は校内に潜入させました。後は『強欲』と『怠惰』の名の元に認可証を集めまくれば、計画の第一段階は終了です。そつすればいぐら二調律が働きかけよつが我等に敵は無しです」

なにやら不穏な事を口走る彼らは、得に眼鏡をかけた少年からはそれがこそ明らかに『ただ者じゃない』気が感じられた。

「さて。わざわざ行きますか。『神狩り』……再開ですよ。フフフ

そして彼等は踵を返し、屋上を去った。

体育館。そこに敷き詰められるようにおかれた椅子には皇学園の在校生がすわっている。俺も例外ではない。

「えへ、それでは～今年度も皇学園の生徒であるといつ皿覚をもつて、勉学に励んで頂きたい。以上だ～」

この間延びした声で演説をしていたのはうちの学園長、美苅 学。みかるまなぶ  
ハワイアン的な恰好をしていて見た目どつりチャラんポランな奴だ。なんと齡22歳…。突っ込みたいことはいろいろあるが、まあやめておこう。

「にしても、おめーが初日から遅刻するとわな～」

学園長の挨拶が終わると同時に左隣から俺に話しかける奴がいた。

「わう～おまえだつて遅刻していたじゃないか。結城」

朝から少しだけ触れていたが、こいつが結城という奴だ。本人いわく下の名前は誰も知らない。ということにしてほしいとの事だ。そういうふうにした謎の存在がかっこよさを引き出すらしい。…ていうか、学生名簿にはしっかりと結城 霞ゆうかと書かれてはいるが…。

俺が学園に着いたのは、10時を少しまわった時の事だ。しかし、校門をくぐる手前、結城とでくわした。つまりはこいつも遅刻したこと。「うー」とだ。

「いやー、今日さ、普通に登校だと思つて来てみたら、誰もいねえじゃん？ そしたらおまえから電話かかってきて今日の登校時間を教えてもらひたわけよ」

なるほど。どうやら俺がさつきに電話したとき、今日の予定を聞いてきたのはそのためらしい。

「…それで、一旦家に戻つたら遅刻したと？ 馬鹿だな」

「うひせーな。そういうテメエはどうなんだよ」

「…人助けしてたら遅刻した」

別に嘘は言つていない。しかし結城は「そんな言い訳で済んだら、警察いらないぜ」と肩を竦めていた。

そんなおり、司会のアナウンスが館内に響く。

『これにて、始業式を閉式といたします。なお、広場の方にクラス替えの紙を貼つておりますので、自分のクラスを確認後、教室でHRを受けたら各自、入学式の準備にあたってください』

聞き終わると生徒たちは一斉に席を立ち、流れるように館内を後にする。俺も例外なくその流れにのる。まるで、休日の町の人波に揉まれるようにながら、俺と結城も館内を後にする。館内から出た生徒はみな広場の方へと向かっていた。しかし、そこへ行くための道は一つあり、裏庭を通り、中庭を通り、大半の生徒の行く道は一分されている。そのため、さつきまで人の波つてものは多少なりとも柔らかんでいた。

そんな裏庭にも中庭にも向かわずに体育館の玄関横で壁にもたれるようにして俺と結城は佇んでいた。先に口を開けたのは結城の方だった。

「んで?。どうすんや」

「どうするって何を?」

「クラス替え、見に行くのか?」

そう俺に尋ねて来る結城。本来、こんな質問 자체がおかしな事と言えるだろう。クラス替えの貼紙を見に行く。普通ならそれが当たり前なんだから。しかし、三調律を担う俺達にとってその行動はあまりにも意味を成さない。だから俺は答えてやる。

「どうせ俺達は同じクラスだよ。…まあ、美歌辺りは見に行つてゐる  
だらうから、念のため後で聞くところよ」

「……」

しかし、何故かそこで黙る結城。

「なんだ？ やつぱり見に行くのか？」

「いや、やつじやなくして。…呼び方、戻したんだな

「え？ あ…ああ…」

いきなり脈絡のない」とを言つ結城に対し、俺の声は裏返つてしまつ。おそらくは『姉さん』から『美歌』に呼び方を戻した事を言つているんだね。

「…今朝な、戻した。といつても親父が帰つてくるまでの間だけだ。  
まあ、つゝこまないぢこてくれ」

ヤレヤレと嘆息をもらし、懇願するよつに俺は結城を横田でみやる。  
すると何故か結城は微笑んでいた。

「いや、別に突つ込むつもりはないよ」

「…じゃあ、何で笑つてんだよ？」

「やっぱお前らは、ありのままのお前らであつたほうがお前らら  
しこと思つただけだ。しかしまあ、よくそつ易々と呼び方を替えら

れたものだ。起用だね、椎名君は

「いや、これでも結構、時間かけたんだぜ」

「どれくらいこよ？」

「……5分くらい？」

「短かっ……」

そんな他愛もない会話を繰り広げていると過ぎ行く生徒の中から声をかけてくる女生徒がいた。

「あ、いたいた。もう、どうに行つてたの？ 心配しちゃつたじゃない。あ、結城君、おひつけ！」

噂をすればなんとやらつて奴か。俺達に声をかけてきた女生徒美歌が目の前で立ち止った。その傍らには姫歌もいる。結城は適当に「うっす」と余糸する。

「心配も向も、俺は普通に過いでいただけなんだが……」

「右の意見を肯定

俺の左側に立つている結城がそう告げる。

「まあまあ。お姉ちゃんは心配してたんだよ。『ああ……。椎名君

は無事登校出来たのかしら』って。おかげで式中もずっとソワソワしてたもんね?』

「ちょ、ちょと…」

急に饒舌になる姫歌。美歌も何故か顔を赤らめている。確かに俺は再登校してから美歌たちと話すのはこれが初めてだ。美歌の心配性を考えるならメールの一つでも送れば良かつたのかも知れない。これは素直に謝つておいた方がいいだろ?』

「すま……」

「ていうか、見に行かないの? クラス割り

謝りうとしたところであるで割り込むかのように姫歌がそう告げた。

「うおい!! 人が謝りうとした人に割り込むなよ!」

「え? お前こんな事で謝るの? なんか安つペえ~」

「うひせえな、結城。まずはテメヒから謝まらせいやうつか?』

「すいませんでした」

一瞬にして謝りだす結城に美歌も姫歌も苦笑しているようだ。

「なんか結城君の方が安っぽいね。まあいいや。で、見に行かないの？ クラス割り」

美歌は「俺は安っぽくねえよ」とわめく結城を無視して続ける。

「俺はお前らが見に行つてくれるとと思つてたんだが」

「それならみんなで行きましょ。その方が何かと手つ取り早いでしょ？」

美歌の提案に対しても皆が肯定し、「じゃ、行つてみよ」と姫歌が先陣をきりながら次に結城、美歌と俺の順でその場を後にする。そして、俺は右肩のすぐ横にある美歌の頭に手を置く。撫でるよいつこ髪を梳きながら、せつきの出来事を改めて蒸し返す。

「…すまなかつたな。今度からはけやんとメールとかするからさ」

顔を赤らめながら俺をみやる美歌。

「…別に大丈夫よ。…それより…手…  
「手？ ああ、『メン…』」

俺は慌てて美歌の頭から手を下ろす。

「悪いな…。ついクセで」

俺は姫歌と美歌に限り、頭を無性に撫でたくなつてしまつ。ミーナいわく『変態シスコン野郎』だそつだ。

「「うん。……別にいいんだけど……むしろそのまままで…」

許しが得たのはいいが、最後の方がうまく聞き取れなかつたな。

「ん？ なんだって？」

「な、何でもありません！」

…あつや。まあ、本人がそういつのならそつなんだろう。

「あ、そつそつ。三人とも」

先行していた姫歌が振り返つて、俺達をそれぞれ見回した。

「なによ？ 姫歌っち」

結城の冗談めかした呼び方を無視して姫歌は話続ける。

「さつき学園長から教えてもらつたんだけど……。どうやらうひの

クラスに転校生が来るらしいんだよね」

「「「はつ？」」

唐突な姫歌の宣告に俺達三人は同時に疑問符を浮かべた。

「いやいや、この学園に転校制度は……」

そこまで言つて俺は『氣づく』。さつき助けたうちの女生徒は自分を「転校生」だと言つていた。しかも姫歌の話が確かに学園長公認、しかもうちのクラス…。ならあの女生徒は『一般生徒にはなりえない存在』ということだ。

「…あれ？」

俺はさらなる疑問を浮かべ、耳元では「どうかしたの?」といつ美歌の囁きだけが聞こえていた。

椎名がそんなことに懸念している頃、学園長室には一人の女生徒が佇んでいた。

来客用のソファに腰を落とし、事務員にだされたコーヒーに口をつけると、まるで満足したかのように微笑みながらカップを置いた。

そんな彼女といえば黒髪に漆黒の瞳。身長はさして高くない。顔立ちは見事に整つており、まるで大和撫子のようだ。そう、さつき椎名が不良から助けた自称・転校生である。

もつとも、もう自称などではなく、彼女が学園長室いるという時点でそれは公認の事となっている。

嘆息の混じった声で彼女はつぶやいた。

「…どうしてこんな事になつたのかな」

どうも話の筋がわからないような言葉だが、しかし彼女の次に連ねるであろう言葉は勢いよく開かれた学園長室の扉の音で遮られた。

洗礼な装飾が施された扉から現れたのはハワイアンな服装の男。あまりにもこの場に相応しくない人物というのが、端からみた第一印象だが、彼ほどこの場に相応しい人物はない。

「遅かつたじゃないですか…。学園」

「いやー」「めん」「めん。新年度ともなると何かと干渉しちゃ

「…あんな適当な挨拶で、よくそんな事が言えますね」

「……見てたの?」

「いえ、見てないです。けべかの反応からして、やつやつ適当な挨拶だったみたいですね」

してからされたが、学園長である美咲 学は顔をすくめ、まるで呪われたよつてやつをやつた。

「全く…。相手ど人を食つた性格の奴は久しぶりにみたよ」  
「あつがとうござります」

「いや、褒めてないからねー!？」

ため息を漏らしながら女生徒の向かいの椅子に腰掛ける学。

「じゃあ、これ。渡してくださいから」

そうじつて彼が取り出したのは黒の認可証。それを開いて女生徒に

渡す。写真を貼りつける部分にはすでに彼女の顔写真があった。

「黒の認可証ですか…」

「ああ。一般の人はそう呼ぶけどね。正式には黒の個別情報体ブラック・アカウントって言つんだよ」

「…中一ですか?」

それを聞いた学はやるせなさにつに含み笑いを浮かべていた。

「いやー、それを言わるとイタイんだよね。何せ、考えたのは僕  
じゃなくて今から君のクラスメイトになる奴何だけど」

学は前屈みになっていた体を一気に背もたれへと預けた。

「しかし、どうしてまた、この学園に?『君といつ存在』がなぜ  
人一人にこだわる?」

「…それはまた後で話します」

そう言って彼女は立ち上がり、学の後ろにある窓に歩み寄った。そこから見渡せる広場は生徒たちで行き交っていた。行き交う先は広場の中央。クラス分けの紙が貼られた所だ。

「天神の三人に会つてからでも遅くはないと思います。…積もる話

もありますし

彼女はひたすらに生徒たちの波を見てそつと語った。

広場前へとやつてきた。やはりというか、当然といつか…。ここから見える広場の中央は生徒たちで行き交つていた。目的はおそらくてか確実にクラス分けの貼紙だらう。中央部からこちら側に戻つて来る生徒たちは「何組だった?」「私、B組~」などと当たり障りのない会話をしている。

「ありやりや～ なかなかビーツしてめちゃくちゃなアレだね～」

「ドレだよ」

広場の中央をみながら姫歌はそう言つた。ていうかこいつは今年度、何のキャラを押していくつもりなんだ? 僕はそんな姫歌にとりあえず突つ込みを入れてから話を先に進める事にした。

「どうする? どうせみんな同じクラスだらうし、誰か一人の名前を確認できればそれでいいんだろ? けど…」

「つつてもあの人だかりじやな～」

結城は嘆息を漏らしながらそう言つた。

「いひなつたら…。姫歌よ」

そつこつて姫歌の両肩に手を置く。身長差が20センチほどあるせいか…。妙に置きにくい。まあ、それはともかくとして俺は一つの提案を提示する。

「お前のその小さい体を活かし、あの人込みのなかを突き進んで、貼紙を見ててくれ」

「うふ。わかった。じゃあ、ちょっと行かへるよ」

そして踵を帰し、走り去った。と思つたが再び踵を帰し俺の元へと戻ってきた。

「…って、出来るか…！ いくらあたしが小さくても人込みをすり抜けられるわけないでしょ！ バカ椎名…！」

「いや、だからすり抜けるんじゃなくて、突き進むんだよ」

「なあさり、出来ないわよ…」

「…あそ」

「どうあえず、近くまで言つてみない？」

美歌のそのまともな提案（少なくとも俺の提案よりは）で俺達は広場中央へと向かう事にした。近づけば近づくほど人がどれだけいるのか実感できる。貼紙が貼られた位置から1.5m程離れた所。そこで足止めをくらうほどの人ばかりだ。貼紙は見えるといえば見えるが、比較的目が悪い俺からすればみんなの名前なんてただの点だ。結城はといえば「ここからじゃ良くわかんねえな」と両手を左右に振り、降参の意を見せていた。美歌は前に立っている男子生徒の頭が邪魔なんだろう。懸命に背伸びして見ようとするが、こんなアンバランスな背伸びだと貼紙を見るに見れないんじゃないと俺は思う。…姫歌にいたつてはジャンプしてるな。それでも何度もジャンプして悔しがる辺り、やはり成果は得られていないんだろう。

「で、どうするよ？ 自然と人が消えんの待つのかい？」

結城のその一言で俺達三人は懸念しはじめる。そんな時、目前の人込みから聞き慣れた声がした。

「も、申し訳ございません。ちょっと通して貰えないでしょうか？」  
……あやつ」

最後の奇声と共に人込みから俺達の前へと抜け出て来たのはフィアナだつた。淡く輝くアッシュブロンドの長髪は人波に揉まれたせいか、グシヤグシヤになつてゐる。

「つう…。何で私がこんな目に…」

体をうなだれるようにしながら地面に倒れ込んでいるフイアナ。おそらく、この人波に揉まれるのは相当な疲労だったのだろう。

「おい、フイアナ…。大丈夫か？」

俺が声をかけるとフイアナはハッと顔を上げた。俺達の事を一通り見回した後で慌てて立ち上がる。どうやら俺達には気づいてなかつたらしいな。

「も、申し訳ございません。見苦しい所をお見せしてしまって」

「いや、何でそこで謝んだよ…。それより髪、どうにかしたほうがいいぞ」

「髪？ …ひやあああ…！」

俺に言われるまで気づかなかつたのか、自分の髪をポケットから取り出した折りたたみ式の手鏡で確認した後、奇声の交じった驚愕の声を上げるフイアナ。…それと同時に向けられる回りからの視線が痛い。

そんなフイアナを見かねたのか、美歌はどこからともなく取り出したブラシでフイアナの髪を梳きはじめた。

「それで？ フィーちゃん、何組だった？」

美歌が髪を梳き終わるのを待つてから姫歌が聞いた。こんな事を聞くのは他でもない。なぜなら三調律のメンバーは同じクラス。そして学年は違えど、クラス番号は同じの兄弟学級になる。（一学年は委員会に入る前なので例外だ）つまりフィアナのクラスを聞けば、自然と俺達が何組か分かるという寸法だ。最初からこうすれば良かったんだろうが、みんながみんな、この思考に到るから、結局誰かが見に行かなきゃならない。ついには新年度最初のHRに集団遅刻ってわけだ。（実際、去年がそうでした）

「…え？ 先輩方はまだ貼紙を見てないんですか？」

「いや、まだ見てねえからこんな所にいるんだけど…」

結城の言つ通りだ。すでに貼紙を見たなつひとつ自分の教室に向かっている。

「そうですね。…大変申し上げにくいのですが…」

『?  
』

俺達全員は頭に疑問符を浮かべる。何組かを答えるのに何故そうかしらある？

「どうやら、二調律のメンバーは全員が全員、今年度から一緒にクラスになるやうで…」

『…は？』

みんな一斉にその一文字。そりやそうだ。全く以って、意味がわからん。

「それってつまり、今のところの風紀と懲罰、それに諜報のメンバーは学年なくして同じクラスになるやうで…」

「おおー、さすが美歌！！ 理解が早くて助かる。

「はい。学園長にメールで確認もしましたし、間違いないかと…。しかも担任は学園長曰くらがつとめるやうで…」

「はあ？ 何考えてんだ！？ あの変態！」  
そうわざかながら怒氣を含んだ声をあげたのは結城だった。何故変態？

「ていうか、そうなつちやつたら色々とマズイんじゃない？ なんてつたつて学年を無理矢理上げたわけでしょ？」

「ええ。姫歌先輩のおっしゃる通りです。その皿も含めて、先程のメールで聞きましたところ、『飛び級扱いにしといたから（笑）』と返つてまいりました」

「軽つ…… その程度の問題なのか、これって…？」

「いや、椎名よ。これが美苑 学といつ男だ。あの時だって…。うう…鳥肌が…」

結城の手を見ると本当に鳥肌が立つていた。どうやらトロウマに触れたらしいな…。

「…とりあえず、少しふいてもいっても始まらないし、みんなで教室いかない？ そろそろエラ始まるし。転校生もくるりしい」

……その転校生で思い出した。思い出してしまった。いや、正確には姫歌が『転校生が来る』と言つた時から頭をよぎつていたが、なるべく考えないようにしておいた。いやいや今まで。よく頭を整理してみる。

…『転校生』がくる。そしてその子に絡んでた『来栖学院』の生徒。  
…因みに今日は入学式。まずくいけば、『例年の事例』が起じる口。  
そして何故かわからない学園長の『奇妙なクラス替え』

「……新年度早々、めんどくさい事に巻き込まれてるな。まあ、姫歌にベッドから蹴り落とされた時点で何となくわかつてはいたんだが……」

「何ぶつぶつこいつらんの~？ 早くしないと置いてくよ~」

姫歌にやられ、すでに教室へと歩き出したみんなの後ろを俺は歩いた。

この時俺は『これ以上、めんどくさい事は起きない』とかつてに解釈してた。…最もめんどくさい事はこの後に起きるんだけど微塵も悪いことなく…。

\* = 10 (前書き)

投稿が遅れたので、少し長めに書かせていただきました。申し訳ございません

そして、教室へとやつてきたわけだ。場所は普通科棟3階。3年生になつたわけだからまあ当然だ。しかも一番口当たりのいい教室、1組と来た。廊下に出て、窓から眼下を見ればさつきまでいた中庭が見える。そして、この棟を西側とし、対面してある東側には教員棟と専門教科棟が併設した校舎がある。そこを1階と2階から渡り廊下で繋いでいる。つまりこの学園は見方を変えれば工の字を取つてゐるわけだ。……いや、北側に部室棟や多目的室とかがあるからどちらかと言えば江の字か。まあ、何はともあれ、環境的には何ら不満はない。

しかしこうなると色々とめんどくさいのは、教室内で話をしている奴らのほとんどが俺達と関わりのある人物だということだ。

風紀の奴らに懲罰の。そして諜報は……俺と結城……そこにおまけとでもいうように生徒会のメンバーがいる。

本来なら生徒会は学園の中心的な存在なのだろうが、ここでは違う。実際問題、三調律のお荷物でしかない。無論、俺はそう思ったことはないが、なんせ周りがね……。

その事もあつてか現生徒会副会長の雨玖 幸之は俺達を毛嫌いしている。（会長はただいま留学中）それもあつてか、教室には何か

とめんどくさい空気が流れているのは恐いく、俺の気のせいでは無いはずだ。

教室に入ると最初に目に入ったのは黒板にでかでかと書かれた文字だった。

『席はい自由にどうぞ』

そう書かれた黒板に俺はなぜだか憤りを覚えずにはいられなかつた。それは多分、こんな適当な事を言い出す（書き出す）のは学園長の美苅 学しかいからだと肌で感じていたからに違いない。

「アタシ、一番うしる~」

黒板を見るなり、姫歌がそう言つた。姫歌は去年一年間、廊下側ではないベランダ側の一番後ろ、つまり一番いい席を独占していたわけだが、どうやら今年もそのつもりらしい。

姫歌がその席にこだわるのは理由がある。姫歌は身長が低い。だから一番後ろの席だと……眠り放題だ。因みに姫歌の前には必然的にやや身長が高めな俺が座り、そして姫歌の斜め前、つまり俺の隣には、俺と身長が大差ない結城が、やはり必然的に座る。こうすると教壇の方から姫歌はほとんど見えなくなる。因みに美歌は姫歌の隣に座り、いざというときに彼女を起こす役だつたり、彼女の分の

ノートを取る役割（あくまでも自主的に）がある。……」つして考  
えると風紀委員長にも関わらず、一番風紀を乱しているのは姫歌だな。

姫歌が席に着くと同時に俺達は当たり前と言つよう定位置に着いた。因みに俺の前には決まってミーナが座つていたが、彼女が不在な今はフイアナが座ることになった。

こうして一気に席を占領すると席が足りなくなるんじやないかと思つたが、そうでもないらしい。そもそも三調律は全員あわせて18人しかいないからな。後の二十人位の奴らは必然的に生徒会ということになる。

「…にしても学園長も難儀だな。クラス替えの事、フイアナには教えてるのに…。姫歌とはさつき会つたんだろう？ ならその時、教えてくれてもいいだろ」

「やつぱり転校生に浮かれてるんだよ。どんな子かな？ 女の子かな？ 女の子ならフイーちゃんみたいにかわいい子がいいな」

「…や、やめて下さい。私がその…か、かわ…いいだ…なんて」

「うへん…。フイアナちゃんはもう少し自分のかわいさを自覚したほうが良いんじゃなかっしら」

「ええ！？ 美歌先輩まで……」

「ねえ？ 椎名君もそう思つわよね？」

何故、そこで俺にふるか、美歌さんや……。でもまあ、いいで答える  
かつたら、後の空気が悪い。だから俺は正直に言つてやる。

「そうだな……。フィアナはかわいい。多分この世界で一番かわいい

最後の方は冗談めかして言つたつもりだったが、何故かフィアナ  
は顔を赤らめ、

「し、椎名様……」

と返してきた。何その反応？ 言つた手前恥ずかしくなってきたぞ

「ま、かわいいなんて同性に言われるのと異性に言われるの……ま  
してやそれが気がある奴からの物なら何てつたつて『味』が違うよ  
な。フィアナさんよ……。クツクツク

最後に不気味な笑い声を浮かべ結城がそう言つた。俺がその言葉の  
真意を探る前に、

「椎名君…」

「お兄ちゃん…」

ゾク……。つとあるような声で姫歌達が呼びかけてきた。（ていうかなんで今更お兄ちゃん？）この何故か怒り気味の一人をどうするか考えた結果……

「さて、HRまで一眠りするか」

流すことにした。当然だ。何をしたのかわからないのにキレられるのは「メンだ。

「逃げるな———.」

と叫んで来る一人を無視して寝ようとした。が、虚しくも教室の前扉が開く。そこから入ってきたのは学園長だった。どうやらいつのまにかHRの時間になつてたらしい。……てかHRの時間って何時だよ。ちゃんと連絡回せよ。

黒板の方に田をやる。時間は11時34分。……ハンパじゃん！！ 絶対正確な時間なんて決めてねえだろ！！

「……遅いですよ。学園長…。4分の遅刻です」

そう言つたのは一番前の、しかも教壇の真ん前の席に座り、俺達を毛嫌いする生徒会副会長 雨玖 幸之だった。

「お、おお…。何だ。雨玖がHRの時間を知つてんなら、単に学が悪いのか…。と思つてしまふくらい雨玖幸之は正しい。どこまでも、いつでも、いつまでも正しく、だからこそ、奴の中の『正しい』とは違う俺達を嫌つてんだろ。多分だが、あいつが一番前の席を選んだのは眞面目だからというわけではなく、俺達と顔を合わせたくないから。」と俺は思つた。

「『ゴメン』『ゴメン』…じゃあ、とつとつ席つきな〜」

その一言で、まだ立つていたメンバーが手近な席に座る。…やはり、こつしてみるとあれだな。廊下側には必然的に生徒会のメンバーが、そしてベランダ側（つまり俺達側）には三調律のメンバーが目でわかるくらい綺麗に別れた。当然だ。その理由を説明するのが無意味つてくらい、当然の結果だった。

「…さて。春休みはどうだったかな？ 本国に帰つた者、何やらキナ臭いことを調べていた者、…そしてろくな仕事もせずに家でぐーたらと急けていた者。いろいろいるんじゃないかな？」

「…う…。なぜだ？ なぜか妙に心をえぐる単語だ。…そして、なぜみんなしてこっちを見る…？」

「「見るな……」」

俺は叫んだ。後ろの姫歌も叫んだ。… 考えてみれば確かに姫歌も春休み、急けてたな。

「はーい、見ないであげて~」

学がそりゃ言つ。みんながこっちを見るように仕向けたのはお前だろうにーー！

「…諦めろ、椎名…。美苅 学つていうのはああいう奴なんだ…」

息を潜めた声で隣から結城が言つ。

「…ていうか、あいつは何で春休みの俺達の行動を知つてんだ?」

「…諦めろ、椎名…。美苅 学つていうのはああいう奴なんだ…」

同じ台詞を続けた結城はどことなく遠い目をしている。なるほど。  
『密かに』キナ臭い場所を調べていた結城とつて、春休みに全くコントакトを取つてない学にその事が知られているのはかなりの大打撃かも知れない。…諦めろ、結城…。美苅 学つてのはそういう奴なんだ…。

「つて事でみんなにお知らせ。もつ、知つてる人もいるけど、なんと…！ 実は…！ 本日から…！ ……転校生が来ます」

周りのみんなは「マジ…？」 「転入出来たっけ？ ウチ」とまあ当然な反応を見せていく。

「はいはーい。その子は女の子ですか？」

姫歌が聞いた。学は不適な笑みを浮かべ、

「ふつ…。そう通り…。しかもかなりの可愛い子ちゃんだぜ」

おおと男子の歓喜の声が上がる。あのお堅い爾玖でさえ、僅かながら反応を見せている。そりやそうだ。転校生 + 可愛い女の子つきたらそれはさながらフィクション的なことであつて決して現実には起こりえないからだ。だから誰しも喜ばすにはいられない。…俺を除いて…。なぜだか、今から来る転校生に對して嫌な予感がするんだ。

「はい。じゃあ入つとこで～」

ビーヒが間延びした声で学が言つと、前扉が静かに開いた。そして、

(……まひざ……)

俺は心中で呟いた。そこから現れたのは約1時間半前に俺が来栖の不良から助けた女生徒だった。

「おおおーー」と男性陣の声が上がった。もちろん、結城も。俺は沈黙。幸い、彼女は俺に気づいてない。だから、せめて今日だけでも関わらずに過ごしたい。

「じゃあ、自己紹介して」

「はい」

「だが、俺のそんなはない願いは叶うはずが無かつた。」

彼女が黒板に自分の名前を書く。その文字はチョークでは絶対書けないくらい、例えるなら書道のそれに近かつた。だが、そんなモノは到底、気にならなかつた。なぜなら彼女が黒板に書いた名前

『天神 雪名』

その名前、といつよりも姓の部分に皆は動搖を示した。そして一斉に俺達を見る。俺と、姫歌と、美歌を……。

「天…神…」

後ろからは姫歌の驚嘆混じりな声が、周囲からは「おー…マジか！？」、「天神って確かあの三人だけのはずじゃ…」という声が聞こえて来る。

そう、俺達の姓は天神…。しかも『あの』天神なんだ…。だからみんなは俺達を見てるんだ。

みんなの視線の先に気づいたらしい転校生 天神 雪名は俺と目が合った。そして、ツカツカと靴を鳴らしながら机の間を歩いてきて、俺の前、正確にはフィアナ隣で立ち止まり…につこりと…笑つた。

(??)

俺の頭の中は疑問符だらけ。それは恐らくクラスのみんながそうだろ？。

「あ、あの…。俺の顔に何かついてる？」

とりあえず、お決まりの台詞を言つてみる。だが、そんな事お構いなしといったように、彼女は笑みを絶やさず口を開いた。

「みんなの反応を見る限りあなたが、天神 椎名ね…。その前に…」

彼女は戦まり、居住まいを正すと、深々とお辞儀して、

「さつきはありがとうございました」

とお礼を言つてきた。いや、礼を言われるほどのはなしではないし…。

「え、えーと…？」

どうしていいのかわからないでいると、彼女はいきなり上体を起こした。反射的に俺はのけ反る。

「あなたが、椎名なら、何も問題無いわね」

問題？ 一体何のことだ？

「つて事でー！」

そう叫ぶと彼女は俺に右手の人差し指を突き出して来る。更に左手は腰に据えて、更なる言葉を、耳を疑いたくなるような言葉を叫んだ。

「…あなた、私と結婚しなさい…！」

…………

…………  
はい？

「あの、もつ一度言つてもうれる？　ちよつと良く聞くこえなかつた」

「あら、奇遇ね。私も良く聞くこえなかつたわ」

俺と美歌がそう言つと連鎖するかの如く、俺も、私もとみんながみんなが自分の耳を疑い始めた。

「何？　ここの人達はみんな耳遠いの？　まあ、いいわ。何度でも  
言つてあげる」

彼女は息を大きく吸い、先程と同じポーズを取つた。俺はといえば、耳を良くすましてゐる。そして、

「あなた、私と結婚しなさい…！…！」

さつきの倍はあるだらうといふやういの声で彼女は言い放った。  
今度は聞き間違はずがなかつた。

『ええええええええ  
ツー?』

と俺を含めたクラスのみんなが叫んだ。

「これで分かつたか? 彼女 天神 雪名こそが、これから始まる物語の主軸なんだ。彼女がここに来るまで起きた事件なんて、ほんの序章に過ぎない。」これから起るんだ。『災厄』は……  
……といつよつこの出会いがまさしく『災厄』だよ……

\* = 10 (後書き)

これで一章（第一巻）終了です。いじりして改めて読み直してみると、矛盾が多いですね。ということは、しばらくしたら構成もしつかり練って、書き直してみたいと思います。あ、引き続き二章は書いていくので、よろしくお願いします。

## 第一厄 イレギュラーな存在①

ガタツ！！

H.R.が終わった瞬間、俺は席を立ち、教室を後にする。ダッシュで。当然、あの女 天神雪名に絡まれたくないからだ。席をたつた瞬間、周りからの視線がきつかったが、それでもなんとか耐え抜き、屋上までやってきた。

「…はあ、はあ…。 一体…何なんだ、あの女」

全速力で走ってきたせいでかなり息があがってるが、そんな事は今 の俺にとってどうでもよかつた。

「とらあえず、水…」

どうでもよかつたが冷静になるためには、少なくともこの後どうすればいいかをきちんと考えるためには、やはり水分が必要だ。てか単にのど渴いたし。そう考えた俺は飲み物を買うこととした。

この学園は校舎がバカでかい分、やはり屋上は広い。そのため、屋上は縦50m、横25mのえらい場所となっている。（最上階までは教室何かが連なってるから、そこまで広く感じない。…だが普通

の学校よつははるかに広いだらつな)

その一画、屋上に出てやや右斜め前、フーンス腰に設置される自販機に歩みよる。ポートの部分にブレザーの内ポケットから取り出した認可証をかざし、ピッという機械音がなると、表記されているタッチパネル式のボタンを押す。そこから更にピーという機械音の後にペットボトルに入ったミネラルウォーターが出でくる。そのままのキャップを開けながら俺は自販機横のベンチに腰を勢いよく落とした。そして、

「…はあああ～～～」

深いため息をついた。はつきり言って今後どうするかなんて、皆田見当もつかねえ。いやいや、そもそもの話として、何で俺がこんな事になつてゐる?

「…俺、なにかしたかな?」

うーん…。今日の出来事を振り返つてみると中々どうして思い浮かばない。飲んでいたミネラルウォーターを横に起き、屋上を見渡してみる。見渡すと言つても、何もないこのだだつ広い空間については、いいアイディアなんて思い浮かぶはずなんてない。

ふと、下の階へと続くドアに目をやる。(ここから直線距離で20mくらい)俺もそこから来た。せつせのうちで誰も入つて来れないように鍵をかけ…ようと思つたが、屋上のドアには鍵なんてついてない。だから壊した。ドアノブ」と。近くにあつた古いパイプです。今にして思えばこれつて…。

「誰も入って来れないけど俺も出ていけないよな」

アホだ…。完全無欠のアホだ…。

「…まあいいや。そのうち誰かが直しに来るだろ。今は平穏なこの一時を……」

「平穏な一時つて何？　この後のあなたには何が待ってるの？」

「　ツ！？」

「あ、天神！？」

反射的に立ち上がり、一步後退りながら、彼女を見た。

「雪名でいいよ。他の人を自分の名字で呼ぶのって嫌でしょ？」

「あ、ああ…。それじゃ遠慮なく…。ってそうじゃなくて…」

俺が聞きたいのはいつの間に俺の隣にいたんだって事だ。…いや、

そんな芸術ができる存在なんてたかが知れる。

「…やつぱつ雪名も持つてるんだな？ なにかしらの力を…」

「あ、早速『雪名』って読んでくれるんだ。ありがとう、マイダーリン…」

「え？ ああ、そりゃどう…。つてやつじやなくて…。 てか誰がダークンだ！」

「まあまあ。とりあえず座りなよ。ほひ」

自分の隣をポンポンと叩いて座るよう促す雪名を俺は無視して、ベンチの隅に座る。真ん中辺りに座っている雪名は一瞬むすっとし、改めて俺の隣に寄ってきた。…零距離位置に。

(…せつからく一番離れたところに座ったの…)

内心、そりゃやきながら、俺はこの状況が非常にマズイという事に気がついた。大和撫子な雪名と屋上のベンチで一人きり。ドアは壊れ、誰も入つてこれない。…そりにぞくさに紛れて自分の腕を俺の腕に絡めてくる雪名。まつきり言つなんじこんな状況、男子なら願つたり叶つたりのシチュエーションだろひ。

「私に聞きたい」と、いろいろあるだらうけど先に一つ、質問していい？」

「あ、ああ……」

「神様つていふと毎日つへ。」

いきなり脈絡のないことを叫び雪哉。…たまにこるんだよな。そんなアホみたいな質問する奴…。俺はだるさ半分、めんどくささ半分でいつもの答えを叫びつける。

「わあてな…。こねかもしないし、いないかもしない。ていうか、いるかもしないのにいらないなんて言えないだろ? そしていなかもしれないのにいりなんて言えない。そこまで割り切って断言するほど俺は自信家じゃないよ」

「そうだ。自分の田で神様を見たわけでもないのに、そつなくとも『いる』なんて言えない。だから俺はそんな質問にはまじつて風に答えてきた。

「じゃあ、今、田の前に神様がいるなら信じる。」

「やうやうやうだ。自分の田で見たものは信じるよ、俺は。やうじやなことこの世に信じられないものが多すぎだ」

「じゃあ、……はーーー」

そう言って雪名は、自分の顔を自分の右手人差し指で指していく。

「何？ なんかついてんの？」

そう思つた俺は雪名の顔を見るが、別段、至つて普通だ。てか可愛いな、ちくしょひ。

「なんだ、なにもついてないぞ」

「神様」

は？ と思つ。何いきなり神様つて。

「だから神様」

続けて言つ雪名はめひゅくひゅく笑顔だ。右手は未だに自分を指している。えーと……つまりこりゃあれだ。こいつは自分が……

「……自分が神様つて言いたいのか？」

「（）明察……」

「はいはー。寝言は寝て言おうね、雪名ちゃん

「あー！ 田の前に神様いたら信じじむとか言つて信じないじゃん！  
！ 嘘つきーーー！」

そりや そうだろ？ いきなり自分が神だ！！ とかいう奴の話を信じるはずがない。俺がさつきいつた信じるは、その日の前に現れた神様とやらが、神的な力を見せてくれたの話で……

「……じゃあ、見せればいい？」

「え？」

「今から神的な力を見せたら信じてくれる？」

「あ、ああ……」

「わかった！！」

そう言って彼女は立ち上がる。……一瞬、考えを読まれたのかと思つたが、次に目にする光景にそんな思いは搔き消される。

雪名は向き直り、俺と田があつた。そして、

「……」

口元で何かを呴いた。その次の瞬間だ。驚愕するのは……。雪名の漆黒の双眸が色を変えていく。鮮やかな紅蓮へと……。鮮やか過ぎて鮮血なのではと疑うほどだ……。

「…いくよ

雪名がそう呼む、左手を上げた。その上げた手を胸のつりで交錯させるように右耳の方まで持つて来る。そこからどうする？と思つた時だつた。

バンッ！…………ズササアア――――！

ドアが開いた。ていうか吹き飛んだ。吹き飛んだ後、地面を滑るようにして、俺達の近くに流れてくる。そのドアを見てみると、鉄製なのに見事なまでの靴あとがついていた。……俺はこれをやつた奴を知つてゐる。

だから俺は恐る恐る、ドアがあつた場所を見た。姫歌だつた。

…やつぱり。

「…新学期早々…………何やつてゐの？　お兄ちゃん…」

俯きながら言つ姫歌はまるでコラコラとこつ音が聞こえそつた足取りでこちへ向かつて來た。

この時、俺は氣づく。屋上に誰も来てほしくなかつたのならアノブを壊す程度じや全然、意味がないと…。ていうか、何で逃げ道のない屋上に來たんだろうな、俺…。



「この光景を前に俺は一体、どうすればいいんだろつか…。

姫歌と雪名が対峙している。…何やつてんだよと突っ込みたいがそういうこいつ空氣じゃない…。

「何？ 私の椎名に何か用？」

「……」

(私の椎名って何？)

内心、そっぽやきながら姫歌をみた。雪名の問いに対し、ずっと黙つている。…まずい。無言の時の、そしてあの俯いた感じの立ち振る舞には明らかに怒ってる時の姫歌だ…。

「お、おい、姫歌？」

俺は姫歌に駆け寄る。その怒りのボルテージをあげさせないために諭しに入ったのだ。肩に手を置き、片膝をつく。自然と顔を覗き込む形になつた。姫歌の目はもう、まずいなんて言つてられない。もうのすごくまずい！！…なんて言うのかな。目がね、病んでるんだ…。俺はこんな姫歌を過去に一度しか見たことがない。

「…椎名ははじめて」

ああ、そうだ…。こうやって呼び名が何度も変わるのは、怒つてゐる時の姫歌が情緒不安定になるからだ。と、ミーナが言つていたな。当然です。そんなの俺がわかるわけがない。

「え？ あ、ちょっと、姫歌さん！？」

そんな俺を無視して姫歌は数歩、歩み寄る。もちろん雪名に…。俺の眼前には姫歌が立つていて、その俺と姫歌の直線上に雪名がいる。…で？ 一体、この二人は何しようとしてんですかね？

「雪名さん……だけ？ この学園に何しにきたの？」

おいおい…。あんなに転校生に胸を踊らせていたお前がそれを言つか？

「何しにって…。そりゃあ、あなたたちに会つによ。強いて言えば『天神』のあなたたちに頼み事をしにきたのよ

「…その頼みつて？」

「…落とし物の捜索願い？」

「ふざけてる。そんな事の為にわざわざ転校して来たのか？…て  
いつか、やつちまつたな、雪名よ。今の姫歌に対してもんな解答は  
火に油だ。いや、もう火にガソリンだ！！まあ、おそらく雪名に  
とつては姫歌が何故怒つてるのか、ましてや怒つてるつて事自体に  
気づいてないんじゃないかな？…因みに何故怒つてるのかについて  
は俺も知らん。

「…ふ〜ん、じゃあ今こ〜で、あなたをミンチにすれば私たちはそ  
んな余計な頼み事、聞かずにするわけだ？…ていうかもう聞こいや  
つたんだけどね、エヘッ！」

「…もしかして、怒つてる？」

よつやく氣づいたのか、雪名…。やはり俺が思つた通りだった。つ  
て、感心してる場合じやなくて…！…今、姫歌さんはあなたをミン  
チにするつて言つたんですよ…？

「怒つてないよ〜、ただムカつくだけ。だから潰す。潰して、引き  
延ばして、さらに潰して『これ豚の挽き肉なんだけど、どう〜』つ  
て近所の主婦のおばちゃんに売る。100 500円で。ていうか実  
際に雌豚だし」

よりタチが悪い！！ そして安いな、その肉……いやいや、まで。  
何不適に微笑んでんだ、雪名。

「…何それ？ つまり私にケンカ売つてんのね？ ……上等…！  
なら、そのケンカ、かつてあげるわ…！」

おいおい、戦る気か？ あの『震撼妖姫』姫歌と？ むりだろ。

「ちよ、ちよっとまって…！」

だから俺は一人の間に入ろうとする。止めるために。だが、それは  
入ろうとしただけで、すぐにやめた。そうしようとした瞬間、姫歌  
が駆け出したのだ。

身を低く屈めながら、雪名に駆けていく姫歌。そんな彼女を前に雪  
名は微動だにしない。姫歌が勢いよく殴りかかった。その小さく強  
大な破壊力を持つ拳をまともに受けたら、おそらく、ただじや済ま  
ない。その拳が雪名の顔面を捕らえた。完璧だ。確実に当たる、そ  
う思えた。しかし、姫歌の拳は空を切った。空回り、という表現が  
一番いいのかも知れない。

「…ツー？」

一番驚いてるのはやはり姫歌だ。…後ずさつたのだ、雪名は。ギリギリまで何もせず、攻撃が当たる瞬間に一步だけ。姫歌も数歩、後ずさる。一人の距離が少しだが開いた。

「全く…あんた、何も分かつてないわね。『力』ってのはただヤミクモにふるうだけじゃ意味ないのよ？ そんなんじゃ、ミニンチにする価値すらないじゃない」

…雪名がそう言つた直後、俺の後ろ、つまりは下の階へと続く扉はもうないんだけど 方から足音が聞こえた。もちろん気になつたので振り返つてみる。 美歌だつた。上がって来るなり、訝しげな表情で姫歌達を見た。そんな彼女達は美歌に気づいた様子はない。

「…あの二人、何してるの？」

「女と女の戦い…かな」

「ふーん…まあいいわ。それより椎名君、学園長から伝言よ。至急、学園長室に来いだつて」

「…俺だけ？」

「いいえ、委員長と副委員長の人達全員。後のメンバーは既に入学校の警備にあたつてもらつてる」

よかつた。学園長室に一人で行くのはいやだからな。ていうか、一人で学園長に会いに行くのがいやだからな。

「…じゃあ、いくか。なんかここ、疲れるし」

そう行って、俺は学園長室に向かった。こんなとこに居たくなかつたからか、足がスルスルと階段の方へと向かう。

後ろで「雪名さんも連れて来いって言われたんだけど!」と叫ぶ美歌を無視して進む…。だって、もう余り絡みたくないからな、雪名とは…うん、まあ無理なんだけどね

学園長室。相も変わらず、派手な装飾で彩られている。故に見所が余りないのが特徴だ。あるだろ？ 目立ち過ぎて逆に目立たない。そういう感じだ。

「それで？ ビジしたんですか、学さん」

俺達は今、そんな学園長室に来ている。来客用のソファに座り、呼ばれた理由を問い合わせた。

……因みにこのソファは三人までしか座れないため、中心に俺、右に雪名、左に姫歌と、端から見れば両手に花という感じだが、テープルを挟んだ向かい側にある同型のソファ（向こうの席は美歌が中心。俺から見て右に結城。左側にフィアナが座っている）に腰掛けている美歌がひたすら俺の方を見ている。……笑顔で。目が笑っていない方の笑顔で。……笑顔は美歌が怒っている時意外に見たことがない。

だから、俺は恐怖心から両手に花なんて思考はこれっぽっちも浮かばなかつた。さらに両サイドの二人は睨み合つてるしね。

……ていうか、なんで美歌は、怒っているんだろうか。全く心辺りが

ない。美歌の隣りに座っているフイアナもどこか面白くなさそうな面持ちだ。……結城だけが、なぜか必死に笑いを堪えてるのが気に障る。おそらく美歌が俺に対して怒ってる理由を知っているに違いない。後で問い合わせてみよう。ていうか、お前は委員長でも副委員長でもないだろ、なんでここに居るんだよ。

「いや、君達を呼んだのはほりょくとした問題があつてね」

学は学園長が座る専用の椅子に座り、机上に頬杖をつきながら俺の問いへと答え始めた。

「……問題、ですか？」

「うふ、僕もさつき知ったんだけどね……」

「学さん、それは俺から話をさせてもらいますよ」

そう水を差すように言つたのは結城だった。今まで笑いを堪えていたのに、すぐに真剣な顔になつた。そんな結城に俺は器用な奴だなと思いつつ、黙つて話を聞くことにした。学も無言で肯定する。

「椎名、俺はお前が教室から出て言つた後、部室へと向かった。理由はフイアナ達から聞いたお前がやり残した委員会の仕事を片す為

だ

……わずかに俺を皮肉るそのセリフにちょっとイラッとするも、悪いのは俺だから言い返せない。

結城は一呼吸おいて続けた。

「……が、委員会の端末に一通のメールが入っていた」

「そのメールの内容は？」

「いや、別に見てないけど？」

「はあー？」

「つんづん。……因みにメールは音無先輩からだ」

『ええ？』

学と雪名、結城以外の奴が驚嘆の声を上げた。

音無 音色。俺が諜報の委員長になる前の委員長……まあ、前任だな。そして諜報の創設者である。因みに女だ。彼女は名の通り音がなかつた。心臓の音、足音、呼吸音にいたる日常生活に置けるほとんどの『音』を発しなかつた。声以外は。そしてその声は下の名前にふさわしい『音』を奏でるような声だった。まあ、それでも

おしゃべりというわけではなく基本はやはり無口。故に一番静かな人だった為、『諜報』という部門においては彼女の右に出るものはない。そんな彼女は今年の2月に行われた卒業式が終わると同時に行方を眩ませた。まさに音沙汰がなかつたわけだが、その問題も今、解消された。

『そ、そのメールにはなんて！？』

俺、美歌、姫歌、ファイアナは一字一句、違わずにハモった。

「おいおい、おまえら。さつきも言つたがこれは『問題』だ。いわゆる異常事態なんだぞ？ 喜ぶなよ……。まあ、最初は俺も喜んじまつたが」

おい、そんな大事な事がかかるてるのに、お前はさつき、必死で笑いを堪えたり、冗談を言つたりしてたのか。余裕だな。

「……まあ、メールの内容を聞けばいやがおつでも驚くぞ」

そう言って、結城はブレザーから何やら紙を取り出した。どうやらそのメールをプリントアウトしてきたようだ。そのプリントを俺に向かって差し出して来る。読み上げるとこういふ感じ。

「ええーと……。『この手紙を三調律の誰かが見ているといつ事を強く願う。……』三調律か。懐かしい響きだ。ほんの一月、口にしてないだけで、いつも感傷的になるとはな……。最も、私が一年、天神君たちが一年生の頃までは、風紀委員長が赤嶺で懲罰にいたってはまだ存在していなかつたわけなのだが、そんな短い期間でそこまでの協力体制を結べた事に我ながら誇りに思つよ』

そこでみんなは苦笑する。先輩の文面は相変わらずで、普段の口調と明らかに違う。俺は続きを読む。

「『さて、長い前置きはさておき、本題に入らせてもりおひ。……もし、そこに天神妹がいるなら、しかと覚悟しん』」

姫歌は一瞬、「ええ！？」となつたが、すぐに意を決したようで、俺に続きを促した。俺は頷き、更に読み進めていく。

「『さつさつと前前任の風紀委員長、赤嶺だが、学収にいるのは知つてゐるな？』」

学収 正式には学徒収容所。名の通り学生を収容する施設だ。スクール・ゴーストとも呼ばれ、日本の領海線ギリギリに位置し、なおかつ、海底に位置する事から絶対に脱獄できないと言われている。

「『その赤嶺が 脱獄した』」

『なつー?』

俺達はみんな驚愕した。メールを呼んでいた俺でさえ、だ。姫歌は気が気じゃない位に動搖している。なるほど、音無さんが言つていたのは姫歌がこうなると知つていたからだろう。それほどまでに赤嶺という人物は危険なんだ……。続きを読む。

「『問題はここからだ。赤嶺と共に脱獄した奴が他に一人いる。そいつらのデータを付属のファイル貼つておく』」

そこまで読み上げるのをまゝてたかのように結城が一枚の紙を取り出す。どうやらそのファイルもプリントアウトしてきたようだ。折り畳まれたその紙を開いて田の前のテーブルにおく。

「なつー?」

俺は驚愕せざるを得なかつた。そこには一人の顔写真があつた。顔が些かごつい男と、眼鏡をかけた男だ。

その二人はさつき雪名に絡んでいた奴に間違いなかつた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6243w/>

---

神様の落とし物

2011年12月25日12時54分発行